厚岸水鳥観察館だより

別寒辺牛（べかんべうし）

●問い合わせ／水鳥観察館☎52-5988

海ワシよ、いずこへ

北海道で『海ワシ』とは、オオワシとオジロワシの2種をいいます。冬季は主に海岸線近くの海や川の河口で、流氷や氷の境目で魚を主食としています。主要な越冬地である北海道では、自力で自然の餌を食べていた時代から、スケトウダラ漁の際に出る雑魚を食べていた時代、現在は氷下待ち網漁の際に出る雑魚や野生動物の死骸などを食べるなど、年代とともに変化してきています。

その海岸線近くの海や川の河口にいる海ワシが、今季はほとんど見かけません。水鳥観察館では平成9年度から厚岸湖内の海ワシの越冬数調査を行っていますが、平成15年度には過去最高の354羽が確認されました。その後、平成17年度以降はシーズンを通しておおよそ最大150羽から200羽の越冬数でした。ところが今季は、最大42羽の海ワシしか確認できていません。

海ワシたちはどこにいるのでしょうか。今年は、音別や阿寒、弟子屈周辺などの内陸で、群れでいる海ワシの目撃情報をよく聞きます。

ではなぜ、海ワシたちは内陸で見かけるようになったのでしょうか。この冬は、降雪期に入ってからの積雪量が極端に少なく、太田観測所アメダスの11月から1月までの3カ月間の総降雪量は114㌢で、平成7年に水鳥観察館が開館してから3番目に少ない降雪量です。降雪量の少ない冬に共通しているのが、厚岸湖の結氷する面積が少なめで厚みも薄いことです。降雪量の少ない今季も、厚岸湖が凍りにくくなっているようです。海ワシは流氷や氷の境目で魚を採って食べているので、厚岸湖の結氷する面積が少なくなって餌が採りづらい分、野生動物の死骸や内陸の不凍河川で魚を捕食していると思われます。氷の状態に比例するように、降雪量が1番目、2番目に少ない年も、厚岸湖内で確認された海ワシは85羽、86羽と11月から1月までの越冬数が少ないのです。

地球規模の大きな気象変動の影響により、海ワシたちの採食環境の変化は今後も続くと思われますが、海ワシたちにはたくましく生きてほしいと切に願うところです。

湿原などの学術研究に最高50万円を補助します

町では、原始の自然が残されている厚岸湖・別寒辺牛湿原の保護やワイズユース（賢明な利用）に必要な学術資料を得ようと、専門知識を持った大学生や研究者、自然愛好家などを支援する『学術研究奨励補助金制度』を設けています。

対象となるのは、厚岸湖・別寒辺牛湿原の自然科学分野の研究や自然環境と漁業資源・酪農問題の関連を明らかにする社会・人文科学分野の研究などです。上限は50万円で、交通費や宿泊費、車両・カヌー・船舶などの借り上げ料を補助します。

●応募方法／交付要望書などに必要事項を記入して厚岸水鳥観察館（〒088－1140　厚岸町サンヌシ66番地）へ郵送または直接提出

●締め切り／３月31日（当日消印有効）

●交付要望書などの請求先・問い合わせ／水鳥観察館